

末黒野

すぐろの



10月号
(通巻902号)

青鷺

谷底のとことん晴れて朴の花
夏蝶の漆黒ことに増す気品
林泉の池を離れず糸蜻蛉
紫陽花の尽きて残せる錆の綾
絶壁の谷翠巒を切り分けて
寺庭の池を縁取り半夏生草
たまさかのゆとりのひと日遠閑古
赤屋根の里の一戸や山法師
全容の富士の影濃し大夕焼
青鷺の抜き足のままひと雫
雲去りて風やはらかく合歡の花
沖の帆の向き変ふる水脈青岬

森清堯

千の灯

波高き沖ゆく船や花とべら
くちなしや憂き夜の窓を少し開け
十葉やもつれ話の根の深き
涼しさや千のビルの灯港の灯
梔子の香のたつ夕べ雨もよひ
雨上がるかはたれ時の四十雀
照り返す水田や畦の桑苳
山里の無人の社合歡の花
紫陽花の明かりに立てり童子仏
湿原の幽けき流れ葎雀
闇高くつかず離れず恋蛩
朝焼や目覚めきらざる街包み

岡野里子

夏盛ん

黒滝志麻子

(顧問)

山からの風のしめりや蛍の夜
涼風や人の話の外にをり
アイスティー浜の茶房の吊りランプ
石庭の石に影置き黒揚羽
ガラス器をすべて磨きて夏盛ん
頃合に出すぬくきもの夏料理
山里のほのかに灯り誘蛾灯
かなな屑匂ふ木蔭や三尺寝

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



南白亀川

田中臥石

星涼し

森清信子

蛤を拾ふや妻の潮衣
蛤を足で探すや予後夫婦
九十九里の沖の涯より雲の峰
キューポラの街の裏路地濃紫陽花
立葵故郷離れて六十年
いくばくの稿料を得て冷奴
川近く普羅碑ありけり沙羅の花
濡れてゐる梅雨の普羅碑でありけり
梅雨の傘波郷の跡追ふ南白亀川
苗育つ娘の田圃三町歩

青柿の落ちて弾めり石畳
紅薔薇崩さぬやうに水替へて
夫の背の急に止まりぬ蛇の衣
湿る朝楯子の花槌せ初めて
溪流を阻む大岩齒朶若葉
神域の雨の上がるや時鳥
無器用に生きて今日ありかたつむり
蓮青葉池の光をひとり占め
神宿る山の滴り手にうけて
星涼し誰もわからぬ死後のこと

愛妻家

石黒興平

夏めくや杵音もるる水車小屋
紅薔薇や男はみんな愛妻家
汗の手の弓引き絞る静寂かな
梅雨茸を踏んで里山けぶらする
桑の実や三頭身の石仏
短夜や目覚めて惜しき妣の夢
手囲ひや点る蛍の息づかひ
山襪は霧わき易く遠郭公
神灯に泛ぶアイコンや堂涼し
羅ににじむ来し方軽からず

熱帯夜

菅野日出子

沖繩忌若き兄しか知らざりき
荒梅雨や馴染の宿の安否問ひ
住人の絶えし隣家や蔦青む
五六羽の鳥の騒ぐ梅雨の雷
捨て置きの廃車かこみて小判草
沖繩に果てし兄への仏桑花
熱帯夜腰の痛みをかこちをり
腰痛のバンドの固し汗湿り
慈悲心鳥啼くや病もやうやくに
梅雨明けや空にぼつかり根無雲

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



半夏生

今村千年

虚子句碑へ続く木道半夏生
そよ風やをみなの肩に糸とんぼ
子燕や根城としたる駐在所
マスクして内緒話の暑さかな
折節の稚の写メール声涼し
ワクチンの二度めの接種針涼し
あけぼのやまくなぎ纏ふ遊歩道

木洩れ日

大川暉美

木洩れ日を抱きて滝の響動かな
絹莢の蔓風に行くへの定まらず
白雲の流れ植田に影落す
大池の舫ふ小舟や花菖蒲
山里を靄のすつぽり梅雨深し
千体の石仏濡らす半夏生
揚羽蝶翅を畳めば風消ゆる

向日葵

太田良一

梅雨寒や一軒残る金物屋
向日葵と内緒話の夜風かな
梅雨寒や行脚の僧の網代笠
山畑や向日葵残す捨畑
山宿に旅の疲れや星涼し
背を向けてさす目葉や夕端居
借景にビルの向日葵畑かな

水 鶏 岡田史女

鉄塔の旗旒信号梅雨の丘
紅させば心引き立つ夏椿
寺裏のくらがり水鶏叩くかな
命綱つけし男や枝払ふ
日延べせし忌を修したり時鳥
日盛りへ出でゆく黒衣まとひては
坂多き山手の丘や蟬時雨

美 登 利 小田嶋野笛

蝙蝠や街川に浮く置屋の灯
紙魚の食ふ美登利の美の字たけくらべ
見返れば見返つてゐる浴衣かな
片蔭や碁敵の門素通りに
簾上げ碁敵ぬつと顔を出す
夕立の過ぎて木蔭の匂ひ立つ
夫死後の夜更し癖や秋隣

竹 落 葉 加藤静江

竹落葉堰を落つるも留まるも
青鷺の冠羽なびかせ湖明かり
梅雨晴間港見下す信号旗
古民家の土間つややかに小玉葱
産土神の香りとくぐる茅の輪かな
夏霧や図書館跡のカフェテラス
一輪の蓮浮かびて濁り池

涼 夜 斉藤マキ子

ことのほか連れは健脚草苺
撓ふとふ力のつきて今年竹
畑を出て側溝渡る花南瓜
すれ違ふ会釈の一会夏帽子
草踏めば草の匂ひの涼夜かな
平凡なひと日のはじめ麦茶煮る
息子来る土用鰻の折提げて

七 変 化 高木邦雄

咲き満ちて滅びの影や七変化
捨畑や枇杷熟るるまま朽つるまま
籠り居や黴の革靴みな磨き
朝風に蔓の迷ひや凌霄花
簾遠く夜風の誘ふ旨寝かな
羅の仕舞凜凜しき能楽師
河童忌や風に解るる蜘蛛の糸

落 し 文 長尾タイ

尺蠖の刻む遅速や八十路越ゆ
明易や一步先き行く夢を追ひ
落し文ときめく胸の今もなほ
夏祓園児の列のしんがりに
緑蔭の寝息かすかや乳母車
梅漬くる故郷の香りこぼしつ
水鉄砲打ち合ふ子等も髭はやし



青炎集

森清

堯選



横浜 山咲和雄

雨蛙忍者の如く消えにけり
風鈴やはるか昭和の風つれて
父の日の二人の父の話かな
早朝と決めて草引く妻けなげ
緑蔭や極楽となる休息所
一筆箋透かし模様の涼しげに

横浜 小林清子

梅雨出水泥まみれなる救助犬
くぐり戸や白極めたる山法師
夕涼や運河を渡るモノレール
朝曇二度のワクチン済みにけり
カルチャーの歌はパリ祭七月来
梅雨明や雲もくもくと観音に

横浜 武田ナオミ

男らの群に紛れてダービーへ
久々の鯛飯の膳夏座敷
挽き立てのコーヒー淹れて梅の雨
削りたての鰹たつぷり冷奴
ナイターや期待投手の登板日
野暮用に上る坂道夏帽子

横浜 佐藤喬風

風鈴や考の画帳に妣の顔
夜店の灯目鼻の歪む鏡掛け
鳩小屋の声の治まり梅雨曇
杣山の深き轍や梅雨茸
多摩川の吠ゆる濁流梅雨鯨
三ツ池の森老鶯の銜して

横浜 布施由岐子

笹の子の身や幾倍の皮の山
枯れ色の中に列なし水芭蕉
荒梅雨や大樹の中へ鴉二羽
姿こそ見えね野太き滝の声
東屋の外を消し去る雷雨かな
黒雲や多摩川沿ひを蛇の目草

横浜 大内由紀

藤椅子やよく寝る猫の髭長し
白百合や玻璃へ音なき雨の粒
見晴かす翠微の山や合歡の花
茶屋街の紅殻格子夏柳
端整なる城の石垣大夕焼
浮かびくる星待つ渚大西日

町田 中野千代子

箱庭や江戸つ子なりと三代目
先生の先づ濡れてをり水鉄砲
昼顔のほのと灯りて蔓数多
仰向きて夜のプールや水の熱
大皿の薬味大盛大鯉
川風に肩円やかや夕涼み

横浜 佐々木永子

使ひ慣れふくるる季寄せ梅雨に入る
玻璃皿に山盛枇杷の甘き味
ケアマネージャー見送る門や大南風
竹林は奥行深し夏薊
妙齡の着こなし粋や夏衣
軒下の南部風鈴旅の苞

横浜 大霜朔朗

どくだみも大事にされて八重の花
南天の花の白さや青き枝
きな粉より香り穏やかはつたい粉
子燕の開く大き口小さき餌
誉め言葉の一つに和み五月晴
老犬の腰を崩しぬ油照

横浜 片岡さか江

短パンの少女ら眩し夏来る
燕の子揃うて待てり口三つ
目まとひや払ひてもなほ纏はりて
翡翠の細波のみを残しけり
貨物船のあまた沖ゆき雲の峰
草刈られ青き匂ひの遊歩道

耕 土 集

岡野 里子



齋膳やまづ牡丹の話より

横浜 小原 紀子

糸取りや疎開して見し婆のわざ
寿福寺の虚子のやぐらや滴れり
すれちがふ僧の袖口汗手貫
夕焼や家路に重き引き出物

夕焼空遊び足りなき帰り道
沈下橋より飛び込む子等や夏旺ん
睡蓮や緑の橘のかかる池
人形を抱いて逝きし子原爆忌
長廊下磨く僧侶や汗落とし

白百合の群るる小径や光堂

印西 大坂 正

虹立つや濡れて重たきスニーカー
武家屋敷の庭に大粒夏蜜柑
朝採りの胡瓜に花の名残かな
香水の消えぬ高速昇降機

夏大根失せし食欲よみ甦へり
幸せかと問はれまあねと缶ビール
分けあひて飲みし昔や缶ビール
夕顔や犬に曳かれて戻る道
雨粒の光を繋ぐ蜘蛛の糸

父の日や父のおもかげ遠くなり

横浜 玉川 利江

泰山木外人墓地を見守りぬ
仕事中の盲導犬や炎天下
ヘッドホンと紛ふや首の扇風機
さみどりもピンクの館も葛桜

一面に雲の流るる代田かな
かき氷童女の舌の赤青黄
散りてなほ焰となりて海紅豆
乱れ飛ぶ夜空の影や蚊喰鳥
木も草も吾もうなだるる夏の昼

子供らの駆け抜けて風夏座敷

横浜 森川 享

がまがへる主顔して庭の奥
棒で描く夢の間取り凶夏の浜
土埃おさめて匂ふ夕立かな
捕虫網持つ兄の後忍び足

色あひの移ろふ箱根空木かな
父の日や長子の仕種我に似て
送られて男日傘に気後れし
街騒をはるかにしたり蓮の花
大の字となり甚平の気安さよ

遠雷や庭師の背の忙しげに

葉山 伊藤 美緒

叔母の忌は我が誕生日沙羅開く
コカコーラの看板褪せて海開き
夕風や竹の柱の海の家
石段は磯へ近道夏帽子

ばたばたと忙しき風や洪団扇
気ままなる暮らし身に付き夕端居
来客の一人もあらず守宮啼く
老いなれや気分体力失する夏
快気てふ友の便りや凌霄花

朝晴れて今日梅雨入りと気象庁

横浜 小長谷 紘

直立の菖蒲の水面波立てず
草取りや日暮待たるるカレーの香
父の日は誕生日なり酒並ぶ
遠雷や北鮮の黙不気味なる

どぼどぼと排水溝や梅雨長し
積ん読の鬼滅の刃籠もる梅雨
放課後の子等の寄り道花柵榴
短夜や番付表と虫眼鏡
全開や仏間の花に大西日

霊峰を白雲越へる代田かな

新潟 太田子エ子

生国の町古びたり桐の花
晩年もなほ夢追ふや茄子の花
普段着や一期一会の若葉風
青梅落つ茶飲み話の輪のなかに

梅雨寒や事故の現場の生々し
大いなるものを制すや蟻の列
青梅や日にじつくりと焼かれぬて
待ち切れぬビニールプール囲む子ら
草刈機終日続く金属音

横浜 平野 秀子

横浜 平田 きみ

横浜 森竹 治郎

横浜 杉山 善信

横浜 喜田 君江

横浜 久島しんの

福岡 青柳 節子